

家庭環境の変化に伴う吃音の推移

—遊戯療法による吃音男児の治療過程と母親のカウンセリング—

研究第6部 山本清恵・権平俊子

I はじめに

吃音の発生については、その原因説が種々云われてきたが、現在では情緒障害によるものだという見方が多い。特に、幼児期においては、新しい環境に打ち込めなかったり、母親のあつかいの変化などで、情緒不安定になりやすく、しばしば、チック、夜尿等と同様に吃音を示す子どもがある。そして、吃音については、子ども自身が思うように話せないことでフラストレーションされるので、更に情緒障害を重くしてしまうことがある。そこで、幼児期の吃音に対しては、言語治療など直接に吃音に働きかけず、背景になっている情緒障害に対して遊戯療法を行ってその改善をはかることが最善の方法であり、併行して母親のカウンセリングを行い、母親の心理的な問題を解決し、子どもに対する育児態度を改善することが有効であると考えられている。

ここで述べる事例は、母親との2人暮らしの環境で成長した男児が幼稚園に入園後、難発症状で吃音が発生したが、頻発ではないので、母親は放置していた。従って、子ども自身が気にし始めた時、母親が相談に来所し、治療に入ったが、治療中に就学、更に母親の婚約などの環境の変化があり、心理的に緊張しやすい状態を招き、そのため吃音の症状も一進一退の状態が続いた。その後、本児の情緒障害がほぼ改善された時、母親が再婚し、家庭生活が安定したことにより吃音も完全に消失した。

治療過程では、初回は消極的で場面緘黙があり、治療者には、たまに単語で応ずるのみの回避行動がみられたが、次第に攻撃性を表出できるようになり、同時に治療者の話しかけによく応じるようになり、終了時には活発で明るい少年になった。この間、環境の影響を受けて何度か吃音の症状が多少悪化した時もあったが、治療者に受け容れられることにより、遊びの場面で積極的に自分を表現して、欲求不満や緊張を解消していくことができた。そこで、家族環境の変化を背景とする母子関係と本

児の吃音の治療過程を中心に、事例報告をし、検討を加えたい。

II 事例

1. 治療対象児：K（男児）5歳2ヶ月（治療開始時）
2. Kの主訴：吃音
3. Kの生育歴

(1) 出生時及び乳児期：妊娠中特に異常はなく、父27才、母26才時に正常出産で生れる。ひとり歩き1才1ヶ月、話し始め1才6ヶ月、その頃喘息で入院、投薬治療により一応治癒している。

(2) 家族環境：1才6ヶ月時実父が転勤で、親子3人の地方暮らしになる。2才6ヶ月時実父が病気で急死、従って2才8ヶ月時に東京へ戻り、マンションで母親と2人暮らしが始まる。治療中母親に父親のごとを問うと、Kに実父の死亡を告げていないばかりか、写真などもKの目にふれないようにしていると、カウンセラーに述べていた。Kの6才8ヶ月時、再婚の話が起り、カウンセラーが実父の死亡をKに告げてない事について、どう扱うか問いかけたら、Kは実父の死亡を知っている様子であるが、家庭内ではお互いにタブー視して話題にじたことはない。それ故、再婚の際に実父のことは改めて話さなくても大丈夫だと述べていた。

6歳8ヶ月、Kの母親は1才年上の男性と見合結婚をした。父親がいない家庭は不自然だから再婚はKのためであると母親は述べている。義父は外国勤務中に先妻に死なれて、日本へ戻り4才の娘と実家に同居していたので、再婚と同時にKのマンションに転居してきた。Kは2才年下の義妹ができ、4人家族になった。Kは環境の好転を素直に受けとめて、父親ができたことを喜んで「家族4人で…」と治療者に話すなどしている。義父は日曜日にKとよく遊んでくれる。母親は義妹の世話をすることでKがいじけないように気づかい、この環境の変化はKには負の働きは殆んど認められない。しかし、義妹は母

親に慣れにくく、自発行動がないなど扱い難い子どもだとKの母親は述べている。このため、Kの義父は心配して、ある相談所（義父の兄嫁の紹介）を訪ねており、母親もよび出されているということである。

(3) 生計：実父はひとり息子であったので、父方の祖父はKをかわいがり、母親への援助を十分にしていた。同時に母方の実家も不幸な娘と孫に対して全面的に面倒をみているので暮しにはこと欠かない。母親は自宅を週1回幼児に英語を教え、Kに母親の働く姿をみせていると述べている。初期に、カウンセラーに将来の生計をKにどう話すか相談したことがあり、暮しは労働の結果であるという原則をKに教えたいからとも述べている。

(4) 養育状態：

Kは鈴木ビネー式知能検査で、I Q 98、知能年令4歳11ヶ月（歴年齢5歳0ヶ月）、検査中の行動記録では、検査室にはひとりであるが、始めから涙ぐみ検査中何度も「帰りたい」と訴えている。ことばでの応答に吃音が頻発している。この検査は緊張状態にあって真のI Qが調べられなかったという見解から、治療開始後再び同検査を施行した結果、歴年令5才10ヶ月、知能年令6才10ヶ月、I Q 117、検査中体を動かしてじっとしていない、と所見を得ている。

Kは近所の幼稚園に3年保育から入園した。相談に来所したのは5才0ヶ月時であるが、その1年位前から母親はKの吃音に気づいていたが、軽いので気にしないでいた。大分前から同じ幼稚園の母親から来所をすすめられていたが、K自身が吃音を気にし始めた時点で心配し来所した。

Kは母親や祖父母達などから不びんに思われていたもので、K中心の場面が多いと推察できる。Kは行動的であるが、消極的な性格傾向であり、この生育歴からみても、社会生活に対する適応が育っているとは思われないので、入園後フラストレートされる場面が多く、緊張状態が続き、吃音が発生したものと思われる。

治療開始後も母親はKを連れて、Kの友人母子（不特定）と4人で1泊旅行をしばしば計画し、実行している。この旅行はKには新しい場面の適応を強いらられ、よい結果とはなっていない。又、Kの就学については父方の祖父の圧力があって、入学校の決定が遅れ、母親もイライラし、Kは情緒不安定を呈している。結局、区域外だが徒歩通学のできる有名公立校に入学した。母親は就学迄はあまり学習を強要していなかったが、就学後は学習に固執するようになり、Kは叱られて2度、泣いて手足が硬直状態を呈したことがある。この時の脳波検査では異常

は認められないが、「過呼吸による泣き入りひきつけ様のもの」という所見を得ている。受持の教師は比較的面倒みがよく、また厳しい面もある人で、Kには相性がいいと母親は述べている。Kは就学と同時に当所の学習指導グループに入り、月1回、母子で学習指導を受けている。

(5) 予後：7才3ヶ月で治療は終了し、現在7才8ヶ月時では、吃音は消失し、学習意欲も出てきて、成績も向上していると、母親は述べている。

4. 治療：Kの情緒障害に対する治療は、昭和57年1月から2年1ヶ月に亘って行われた。Kに対しては遊戯療法を週1回行い、山本が担当し、隔週の母親のカウンセリングは権平が担当した。

III 治療過程

第1回（1/25日）

Kはプレイ室に入ると、室内をそとと見まわしながら所在なさそうに、ゆっくり治療者の方を見て、「ボク遊んでいいんですか」、治療者は「え、好きなおもちゃで遊んでいいのよ」。そこでKは探索行動を始める。ロッカーダンスの棚から、先ずファイトマンを出し、スイッチボタンを押して、バーベルが上手に持ち上ったら、次はドンケツゲームを出してボタンを両手で押してみる。ポカポンを出して…と、治療者には見向きもせず、次から次へとおもちゃを調べる。新しい場所はKにとって緊張を高めるのに十分ははずだが、遊具のある部屋に突然入ったことは思いがけず、Kの好奇心をかきたて、積極的に動いていたようにみえた。

野球ゲームの箱をとり出したので、治療者が箱から出して、球をバットではじいてみせると、Kもやってみるが、急に上達するのは難しいゲームだから、タイミングが合わない。それでもKは、治療者が球をバットに向かって押し出すと、打つ、空振りする。10回位やってみて止める。サンドバックの人形が床上に立っているのを見つけて押してみる。人形は起き上りこぼしの様に起きる。K、「どうして起きるの？」治療者「開かってごらん」Kは挑戦的にゲンコツで叩き続ける。それでも倒すことは出来ないで、抱きつき、取り組む。格闘になり、Kは人形にまたがり、おさえつけるが、Kも倒れてしまい、でんぐり返しをして、頭を床にゴツンとぶつける。それを繰り返す。

終了時間になったので、「帰る時間よ。また、来週も遊びましょう」と云うと、すぐ遊びを止め、黙って治療者について部屋を出る。

遊びは行動的だったが、前記の質問の他の発言はなく、黙々と次々玩具を使い、緊張しているのが、殆んど表情の変化はみられない。

▶母親のカウンセリング：母親は硬い表情で、本などの知識から母子関係に問題があると吃音が発生しやすいということに反発しているようで子どもの吃音と自分の問題を全く結びつけようとしなない。

第2回(2/1日)

Kはプレイ室に入ると、床上に空気が半分抜けてしまっていて、半分倒れかけているサンドバッグの人形に注目して、K「どうしたの？」治療者「空気が抜けているの、だから入れましょう」ポンプをセットして、治療者が先ずやってみせて、「ごんごんKちゃん押しして」と云うと待っていたように交替する。空気が入った人形が立ち上ると、Kは安心したように目を他へ移す。机上にある水戸黄門漫遊ゲーム(双六形式)を見つけて、「これする。治療者はルールをKに話しながらゲームをすすめるが、Kはサイコロの数に合わせて駒を進める。それで、最後に治療者が「Kちゃんの勝ね」と云うと、Kは「よかった」とつぶやく。表情はまだ堅い。

第3回～5回(2/8日～2/22日)

治療者の顔を見るとKは「今日も遊ぼう」と先にたってプレイ室へ入る。K「水戸黄門ゲームしたいの」と、積極的に始める。終わった時治療者が「Kちゃんの勝ね」と云うと、Kはかすかに表情を柔らげる。

立ち上って、K「レールをやる」と言って、床上にセットされているプラレールの上の電車のスイッチを入れる。そして1廻り、2廻りして見て、玩具箱の中からもう1台車輛を出して走らす。治療者は「もう一つ走らせようか」と云って3つめの電車を走らせる。始め、治療者がレールの転換をしていたが、「Kちゃんやる？」と言うと、Kは忙しくレール転換をし、3台が追いつ追われつと走るのを見て、次第に興奮して行く。

次の回には4台の電車を走らせ、ぶつかり合うのを見て面白がり、Kの手で電車を倒したりしてまで衝突、追突、脱線、横転を笑を浮べて楽しむ。Kは観客的な立場で仕掛人という様子である。終りの時間になり治療者が「今日は終りよ」と云うと、一瞬「え？」と不服そうにするが、思inaおしたようにプラレールをきれいに片づけて、満足した様子で帰る。

▶母親のカウンセリング(2/8日)：まんがが流行っていて、母親とデンジャーマンごっこをしたがるが、母親ではもの足りないようだ父親のいないことを意識しているようである。早く寝かせたいと思っているが、TVのまんがを見るので、8時に寝かすがやっどであると

母親が話している。

第6回～11回(3/1日～4/12日)

8回目になって急に、来所した時から吃音が目立ち、その後1ヶ月この状態が続いてしまう。7回目はKを連れて来たのは母方の祖父である。この2、3日母親が病気で、Kは祖父宅に預けられていたそうである。

遊びは毎回水戸黄門漫遊ゲームを楽しんでやる。ラッキー箇所止まると嬉しそうな表情をする。この箇所へ止まるとお金が増えるかららしい。勝負の決りが解らないので、治療者が毎回「Kちゃんの勝ち」と云う。次第にKの勝ちが習慣化されてきて、何の感動もなく、次の遊びへと移る。治療者が「何して遊ぶ？」K「オーオーキョオーオハミルクモウモウ」と、このところ発語の状態が悪い。6回から使っているミルクモウモウ遊びをひとりで積極的に出してくる。水を桶に汲み、牛に飲ませ、牛乳絞り、ミルク飲み人形に哺乳壺で飲ませるまでの一連の操作をくり返している。辺りは水だらけになるがお構いなく熱中する。次第に興奮してきて「これ、いらぬ」と云って人形のベビー服を脱がす。口から飲ませ、おしっこを出す人形をさかさにして、お尻から水を入れる。Kにとっては、それは赤ん坊でなく、道具として受けとめているからだろうと思うが、客観的にみると、残酷なシーンである。「あれ、逆にミルクを飲ませるの？」Kは「そう」と答えて平然として続ける。次には、乱暴に牛の頭からじゃあじゃあど水をかけ始める。水遊びが好きだからというだけでなく、遊びを自由自在にしている中に、ひき込まれ、熱中する。こんなKの遊びに、治療者は傍観者の立場にされてしまう。介入するには抵抗さえ感ずる。

終り間近かたが遊びが切れる。そこらを探索している。治療者が「ボール投げしよう」と誘うと素直にドッチボールをする。運動機能は年齢段階より発達しているのを受けのりも投げるのりも上手。何回が続くと椅子の上に立ち、受けて、そのボールを蹴る。全力を出し体当たりでやり、かなり熱中してくる。ボールの投げ方など上手なので、治療者はほめるが、そのことばを聞き入れているようにみえない。帰りにKは「またね」と手を振って帰る。毎回帰る頃は吃音も自立たなくなり、Kは満足しきった表情である。

▶母親のカウンセリング(3/15日)：母親の話だと、近頃は吃りが悪くなっている。それは3月12日に卒園の行事で劇をしたのだが、その練習があつて疲れたためではないだろうか。それと祖父が字を教え込もうとやり出していることも影響していると思う。1週間前に、母親は熱を出してKを実家に預けてひとり暮らしをした。その

時孤独を感じて、父親がいないことは、Kに対する責任が自分だけにかかってくることなんだと考えてしまったと述べている。

▶母親のカウンセリング(4/12日)：3月29日に伊豆へ旅行し、4月10日も小桶園へ旅行している。いずれも、Kの友人母子と一緒になので、母親はKのためにいいことだと思っていると述べているが、カウンセラーは親の気持でKを引き廻しているようでKのためにむしろよくないようだと感じていた。

第12回～20回(4/26日～7/19日)

この頃は来所すると準備室へまず入り、Kは自分で遊具を選ぶ。13回には、スターバード(ジェット戦闘機)を選んだが、たまたま電池が入ってなかった。治療者が「遊んでね。すぐ持ってくるから」と云うと、Kは首を横に振る。「いきたいの？」K「つーれていって」、一緒にエレベーターで3階まで電池をとりに行きながら、「おうちで、お母さんがお使いに行くとき、ひとりで留守番しないの？」K「つれてってもらおう」と言う。Kの心理的な不安定さがうかがえるような気がした。

14回には久しぶりにサンドバックの人形を出して、刀ハンマー、または素手で、人形たちに向う。取り組み、水をかけ、投げ飛ばす等、真剣な表情で全力でぶつかっている。人形のビニールが切れる。空気が抜けて倒れると、Kは勝利者として満足して帰る。

この頃は吃音は殆んど気にならない。そして遊び方は目まぐるしく、次々と遊具を交える。毎回やるミルクモウモウの水遊びと水戸黄門ゲームに続いて、ポカボン、ファイトマン、カニとりゲーム、金魚すくいなどを治療者とゲームする。どれもKはたくさんとり、勝ちたいので、道具を放りだして、両手を使い目茶苦茶になってしまう。このようにKは次第に攻撃性を前面に出してくるようになり、大きな声も出るようになる。続けてしたアイスホッケーゲームなどは観声を上げ、夢中になって、自分の操るゲーム内の人形の仲間入りをして、指で球を運んでしまう。

17回 終了を告げた時には、車に乗って治療者を追いかけてまわる。治療者が逃げると、はやしたて笑いながらぶつかってくる。再度「もう帰るのよ」と云うと「ヤダー」と甘え声。治療者はKとの間の垣が一つとり除かれたように感じた。

▶母親のカウンセリング(4/26日)：「男の子だから、幼稚園からひとりで帰ってくるように云ったら、メソメソ泣いてるんですけど、どうしたらいいでしょう」と母親がカウンセラーに問いかけたので、「Kに早くしっかりしてもらおうと思っていられるのでしょうかが今吃りがよ

くない状態で不安なんだから、Kが迎えに来てほしいと云った時は要求どおりにしてあげた方がいいんじゃないですか」と答えたが、母親はそれに半信半疑で、「子どもの要求どおりに動かなくてはならないんですか。」とつぶやいていた。

▶母親のカウンセリング(5/10日)：後楽園に伯父さん(母の兄で実父の友人)と2人で行けたことでKは喜んでた。母親もよかったと思っている。

▶母親のカウンセリング(5/24日)：近頃は喘息が出ないで体が丈夫になった。そして吃音の状態も良いと述べていた。

▶母親のカウンセリング(6/7日)：前回では吃音の状態がいいと云っていたのに、今回は「この頃吃りがひどい」と云っている。

▶母親のカウンセリング(6/28日)：1週前はKが発熱し治療を休んでいる。Kは風邪でも幼稚園を休むのは嫌いだと述べ、吃りも悪くなっていると云うので、カウンセラーは「かぜの時など健康状態が悪いときには吃音がひどくなるのがよくあるから」と話した。

▶母親のカウンセリング(7/5日)：母親は「吃りは治るんでしょうか?」「いつまでかかりますか?」「見通しは?」と不安になっている。カウンセラーは母親の不安を受けとめながら、「この年齢では1年以上かかる人が多いんですよ。努力しましょう。」と云うと、母親は「小学校までには治してやりたいんです。」と、あせりが出始めている。

▶母親のカウンセリング(7/19日)：Kがひとりで買物に行けるようになり、親として自信が持てたと述べている。また、「幼稚園の泊り保育で箱根へ行き、帰宅したら、ぐっすり昼寝をしていた。充実感が持てたらしい」とも話していた。

第21回～27回(8/16日～9/27日)

治療も2週間休みがあって、その間Kは2度海へ出掛けたと話し、日焼けして遅い。この頃は毎回、初めは少し吃るが、遊び始めると目立たなくなる。野球でもよく自己主張をするようになる。「ボク……」「野球」は難発である。23回、Kが母親より先に来て、母親の伝言を告げた時、単語毎に連発状態であった。また、治療中に全く吃らない時でも、母親の元へ戻ると吃ることもしばしばある。

24回からは、治療者が投げて、Kが打つパターンで、殆んど毎回野球をする。「アウトが3回になったら打つ人は代わりましょう」と治療者が云うと、K「ぼく代わるのいやだな」「それならいいわ」。Kは安心して打ち、走り、得点を黒板に書く。汗でびしょぬれになる。Kがあ

した野球に行くんだよ」「誰と行くの？」K「ぼくとママと〇〇ちゃんと〇〇ちゃん（友人）」とこの頃はよく野球を話題に自分から治療者に話しかけてくる。

帰りにKはよく床に水を撒き散らす。注意すると、K「もう終わりだからいい」と云って、床が一面水びたしになる迄続ける。

▶母親のカウンセリング（8/6日）：伊豆と千葉の海へ泊りがけで行って来ている。車で行った時、Kは車酔いをしたので、自律神経失調を起しやすいのだからと心配している。

▶母親のカウンセリング（8/31日）：「パチンコ玉を飲んで大騒ぎしたんですよ」と、病院へ急いで連れて行き、レントゲンを撮ったりなどしたらしい。下から出たらしく何もなくて済んでよかったと話していた。

▶母親のカウンセリング（9/20日）：今回また吃りについて不安を述べている。「学校へ行って吃ると困る」と。カウンセラーは「どうしても治したいとあせると、子どもに影響を与えて却って治りにくいんですよ」と親の気持が子どもに影響を与えることを母親に気づかせるように努めた。

▶母親のカウンセリング（9/27日）：Kの就学について、父方の祖父が有名公立校に入れたいと云っている。カウンセラーは「近所のお子さんと一緒にの方がいいのでは」と、母親は「近所だと、父がいないのを何かと聞かれることが嫌だから」と述べている。

第28回～29回（10/25日、11/1日）
治療が3週間抜けた。「先週の日曜日はこちらをお休みしてKちゃんは何してたの？」K「旅行してたの」「それでどうしたの？」K「かせひいたよ」。

▶母親のカウンセリング（10/25日）：Kの母子は入学希望区の親戚の家に転入手続をとったと云っている。Kの入学は父方祖父の云うとおりにすることになった。実父は一人息子なのでKのことを後継ぎだと父方祖父は考えて経済的にも援助をしてくれているので反対はできないのだと述べている。

第30回～31回（11/15、11/22日）
Kは1週前は水痘にかかって休む。今回、Kの表情に柔らかさがある。遊びにもリズム感が出て、話し方もどこちなさがとれたように思う。病氣中は母親と2人で家にひきこもっていたらしい。治療までの待ち時間も母の膝の上に抱かれている。

K「ミルクモウモウしたいな」と準備室にとりに行く。相変わらず、机や床を水びだしにする。治療者が「困ったわね、こんな水だらけじゃ。拭かなくちゃ」と云うと、K「拭くのどうするの？」。一緒に雑巾をとりに行き、

Kは力強く床を拭く。その後ボール投げをする。時間の終を告げると、Kはすぐ遊びを止めて母親の所へとんで行く。母親に甘えているのがほほ笑ましく写った。

▶母親のカウンセリング（11/15）：先週Kは水痘にかかっていたが、口が腫れあがりひどかったそうである。就学校については、移籍は済んだのだが、色々やかましくて、まだ決っていない。どこの学校へ行くか告げられないことで、Kを不安にするのではないかと困っていると、述べ、「近くの学校がいやなら私立へあげてはどうですか？」とカウンセラーが云うと、私立なら一流校ではないと駄目で今からではむずかしいと云う。

第32回～35回（12/6日～12/27日）
Kは箱庭をプレイ室に置いておくと、Kは興味を持ち、砂へ手を入れる。「ここにいろいろあるでしょ。どれでも好きに砂の上に置いていいよ。」早速Kは始める。見ると、むかで、とかげ等昆虫類ばかりを探して無秩序に並べている。次に、それらに砂をかけ始める。次第に砂をかける手が上がっていく。砂が箱の外へも散る。「砂遊びをするんじゃないと、箱庭を作るのよ」と注意すると、K「知ってるよ」と云っても、相変わらず続けるので砂が周りに散る。K「お水入れようか」と治療者に同意を求める。しかし、「もう止めようか」と治療者が云い返すと、K「いいよ」と。そこで、治療者が箱庭を片づける。Kは黒板の前で黒板消しの白い粉を、自分のズボンに熱心に塗っている。治療者が「白いズボンにするの？」K「ちがう」「どうして？」K「お母さんが驚くから、お母さん喜ぶよ」、そう言いながら、Kはチョークの粉を、せせせとズボンに塗っている。帰りに母親はそれを見て、「まあー」と目を見る。Kは照れくさそうにする。治療者が「お母さんが喜ぶからって、ね？」と訳をつけてやる。母親は「涙が出る程うれしいわ」と。Kは得意そうにして先になって外へ出る。その後姿を見ながら「かまってもらいたいですね」と治療者が云うと、「そうですね」と母親はなさけなさそうに云う。

▶母親のカウンセリング（12/6日）：地域での就学テストがあったのだが、吃りが出たそうである。近頃はベットの中で話しかけるようになったので、同室で寝ている。甘えるようになってきた。カウンセラーが「甘えはつづばねるのでなくて、甘えさせる方がむしろ離れられるんですよ」と云うと、「前からそう聞いているので、甘えさせるようにしています」と述べている。チョーク遊びは喘息があるので余りやらせたくないと話していた。
第36回～42回（1/10日～2/21日）
Kは治療者の顔を見るなり、左薬指の包帯をつき出して「怪我したの」、「どこで怪我したの？」Kはすぐ答え

ない。少し興奮している様子である。治療者が再度きく。K「公園で」「公園に遊びに行ったの？誰と？」又、Kは答えない。治療者は又再度きく。K「友だちと」、「友だちと遊んで、どうして怪我したの？」Kは面倒そうにして、治療者の持ってきた新しいゲーム（ディズニーランド）を出していたが、K「ころんだの」更に治療者はきいてみる。「ころんでどうして指が切れたの？」K「石で」と即答する。「石にぶつかって血が出たの？」K「そう」「痛かった？」K「痛かったよ」と顔をあげて云う。Kは興奮して話し始めたので、難発状態であって治療者の質問に答え難くなってしまったらしい。ゲームはKの4連勝。K「どうして先生、負けてばかりいるの？」と不思議そうに、半ば得意そうに云う。

その後、Kは刀、バット、トンカチを背中やベルトにさして、サンドバックの人形をそれぞれで叩き、刀の先で無理にビニールを切って、上から押してペチャンコにしてしまい、意気揚々と帰っていく。

39回と40回には、黒板消しをズボンに塗り、チョークの粉で白くしてしまう。母親が喘息を心配しているとカンセラーに聞いたので、治療者が、「その遊びは喉に悪いから止めようか」と云うと、Kは黒板消しを治療者のスラックスにつけようとして追いかける。治療者は逃げ、Kは喜々として追いかけてまわす。「もう今日は帰らましょ」と息を切らせて、Kを抱き、2人で笑ってしまう。

▶母親のカウンセリング（1/10）：人なつこくなって、誰とでも話すようになったそうである。「父親がいないので淋しいのでしょうか。私だけでは不満なのかしら」と母親は述べている。また、母方祖母はKのねだるおもちゃを何軒でも探して、買ってくれるのだが、いいのか。と聞き、更に「私はそうしないけど」とつけ加わえる。カンセラーは「おばあちゃんは甘えられる存在なんですから、いいのではないですか」と答えた。

▶母親のカウンセリング（1/24日）：この頃はまわり道して友だちと帰ってくる。荷物をジャンケンで、持ちっこをする。交通事故が心配になっていると述べ、友達ができるのはいいと思いつつも母親の両極性がうかがわれる。

▶母親のカウンセリング（2/7日）：吃りがよくなってきていると云っている。

第43回～47回（2/28日～4/4日）

Kは準備室から思い出したようにミルクモウモウを持って来る。以前と同様に遊び、辺りに水を散らす、異常な熱中状態は見られなくなった。

絵の具の筆を見つけて、K「えのぐ、えのぐ」とせわしく、治療者に注文する。画用紙にえのぐをただ塗ら

なくて3枚程画いた。次は木切れを室の隅から見つけてきて、セロテープで舟の様に作り、K「これもらっている？」「いいわよ」と治療者の許可を得る。K「ボクが作ったんだ」と母親に見せて、生き生きした表情で帰る。

▶母親のカウンセリング（3/28日）：ぎりぎりになって、希望していた就学校に決ったとのことでほっとしたと述べている。

第48回～55回（4/11日～6/6日）

入学したKは、治療者が聞くことにきちんと応じるようになる。「何組？」K「1組」「先生は何というの？」「〇〇先生、2組は山本先生っていう女の先生だよ」とひきのばしのある話し方だが、吃音はあまり気にならない。

「定期持ってるんだ」とそれらしい物を首から下げて自慢そうに見せる。電車通学の友人の真似で、Kにねだられて母親が作ってあげたそうである。Kは時々大切そうに物を持ってきて、治療者に見せるようになった。

「メリーちゃんのママに買ってもらったんだ」とローブ人形。次の回は腕時計。「何時？」と聞くとK「いいの」と後にかくしてしまう。

この頃は、チョークを折って投げたり、床上で粉々にしたりするようになった。51回までそれを続けたので、52回には、治療者はあらかじめ黒板にチョークを1本だけにしておいた。野球をして得点を書く時のチョークしかないのにKは気づいて、「どうしたの、ないよ」。仕方なく一緒にとりに行き、Kは箱ごと持ってきて、一握りにつかんで、治療者に向かって投げつける。治療者は応戦するためにKをくすぐる。Kは「キャッ、キャッ」と逃げまわる。逃げながらチョークを投げる。床に散ったチョークを踏みつぶし、粉をバイクに塗って、粉だらけとなって、それに熱中してしまう。

▶母親のカウンセリング（4/11日）：大人8人子ども14人で東名バスで川口湖へ行ったと述べている。

▶母親のカウンセリング（4/25日）：この頃吃らなくなったと喜んでいる。

▶母親のカウンセリング（5/8日）：また吃りがひどくなったと云い、給食の袋を忘れたとき、泣きながらとりに戻ってきたなど心配している。後で解ったことだが、この連休に母親は見合をしている。

▶母親のカウンセリング（5/30日）：参観日の様子では、Kは楽しそうだったし、友人関係もいいし、安心であると述べている。

第56回～61回（6/13日～7/25日）

この頃は毎回前半は野球をして室内をよくかけまわる。その後、治療者を犯人にみたと、パトカーに乗って治療

者に向って投輪（輪投げの輪）をとばす。次第にエキサイトしてきて、チョークを折り粉にする。「学校でもその遊びしているの？」と聞くと、K「ちがうよ」「先生におこられるから？」K「おこられないよ、してないもの」「そう。先生はおころうかな」と云うとKは考え込む。「おこればしない？」K「する」と真剣な表情で云う。治療者は思わずほほ笑んだ。そして、次回には新しいチョーク10本を置いたが、野球の得点盤きに使っただけで、折ったりしなくなった。

かぶと虫、今回はすずめを籠に入れて持参。Kは相変らず大切な物を治療者に見せてくれる。K「羽が濡れて飛べなかったから捕ったんだよ」と話している。

Kは4月から当所の学習指導グループに入って月1回の指導日に参加しているが、プレイ室（個別指導の待ち時間、一年生と幼児が遊ぶ室）に入れず、毎回、治療者の手を握ったままである。

60回には久しく影をひそめていた吃音が出ていた。

▶母親のカウンセリング（7/3日）：8月に再婚することになったと話す。4月末に見合いをして、何回かKを連れて会っているそうである。父親になる人は女兒がいるので、気が楽なので決めたと云う。姓が変わる事は、実父の籍から抜く事で1人だけ残るのはおかしいからとKを納得させた。また、結婚の相手を伴ってKの実父方の祖父にあいさつに行った。祖父は「かわいがってやってください」とあいさつしていた。母親は「父親のいない家庭は不自然だから」と再婚の理由を強調している。

▶母親のカウンセリング（7/18日）：前に述べたが、実父の死亡をKに話していないが、Kにどのように話すのかとカウンセラーが問うと、Kは実父の死んだことは知っていて母親に悪いと思ひ話題には出さないようなので放っておいて大丈夫だと思うと述べている。

第62回～73回（8/22日～12/26日）

母親が再婚し、義父と義妹が転居してきて新しい家庭になる。プレイ中よく会話をするようになる。K「そのボールを買ったの」「誰に買ってもらったの？」「おとうさん」「昨日は何してたの？」K「家族で家にいたよ」とか「おとうさんと野球したよ」「僕が打ったんだ」といかにも嬉しそうに話す。プレイは相変らず、野球をして、後半、面をかく、木切れで工作、ゲーム、輪の投げっこ等をするが、以前に比べて情緒の安定が感じられる。又、話もよくする様になり、吃音は消失している。治療者が「学校で一番好きなのはなあに？」と聞くとK「お給食、次は図工」と答えている。

68回の前に家族旅行をした。治療者が野球をしなが

ら「昨日も野球したの？」K「泊まりに行った」「誰と？」K「お母さんとUちゃんとお父さん」「そう」K「野球の物持っでいかなかったから」、Kは構わず話しているが、又吃音がみられる。

▶母親のカウンセリング（8/22日）：結婚式も終り、義妹を連れて来たので、カウンセリングも廊下でした。母親が花嫁姿でいい気分でしたら、K「ママきれいだね」と人前で云うので恥ずかしかった。また「ママ結婚は一度しかしてはいけないんだよ」とも云い、淋しく思った。

▶母親のカウンセリング（9/19日）：「Kがハモニカの練習をしたが、うまく出来なくて泣いて手足が痺れた」「妹が意志を表現しないで困る。おしっこをしぶる。」「義父はテレビを見ながら食事をしてはいけない」と云うなどと愚痴を並べる。そして、「テレビを見ながらはいけないですか」と聞く。カウンセラーは「ながら族の時代だから色々出来る方がと、私は思ってますけど」、母親はうなずく。

▶母親のカウンセリング（10/30）：義妹の問題を出す。自分の意志で何も出来ない子、夜中に泣くと私は放っておいた方がいいと思うが、父親があやす。着衣を自分で選ばせようとするが出来ないので父親がしている。だから私の教育が出来ないと述べている。

▶母親のカウンセリング（11/21日）：Kの友人が交通事故で死亡したので、Kの通学について心配している。

▶母親のカウンセリング（12/12日）：Kの義妹の知能テストをやったところ、I.Q.119である。自発的な行動がないので知能程度を調べたいと母親が父親に内証で、テストを受けさせたことが後になって解った。

▶母親のカウンセリング（12/20日）：義妹のことを父親が叱らないと不満そうに云う。大便の仕末がまだできないのは、教えられていないからだと母親は云う。やらせようとするはず泣くので、いじめているようでありだと不満を述べている。

第74回～78回（1/23日～2/20日）

今回から大ボールをとり出して、サッカーを始める。Kはサッカーは上手で、足で蹴り、膝で蹴上げる。頭で突く。プレイ室でサッカーをするようになってから、治療者が「昨日は何したの？」と聞くとK「お父さんとサッカーしたよ」と云うようになる。

75回には、K「お父さんとサッカークラブに行ったの」「どこにあるの？」K「公園だよ」「子どもがたくさん入ってるのね」K「子どももいるけど、大人もたくさんやってるよ」「お父さんもやったの？」K「そう、お父さんがやったんだよ、僕がついてったんだよ」とサッカーをしなが

帰りに母親に聞いたら、「公園にサッカークラブなんてないですよ、よくそういうデタラメ云うんですよ」と云う。76回にも、友達の誕生日会で出かけた日曜日は、K「うちにずーといたよ」と治療者に話している。

77回は珍らしく20分も遅刻する。Kは治療者の顔をみるなり、「学級会で……（云ってることが治療者に解らない）……して遅くなったんだ」と一所懸命な口調で理由を云う。後2回で治療終了をKに告げると、K「わかってる」と視線をそらして云う。

78回は、箱庭をプレイ室に出しておき、すすめてみる。Kは素直に始める。以前とはちがひ、砂遊びはしない。翅虫類が多く使われているが、全面に、家、木、乳母車様々な動物、人など、40位の小物を散らばせて置く。Kは「ライオンここ」「神さまここ」等の他は殆んど叙述的な発言はない。全体的に並べ方に何の意味もないように見えるが、何かおおらかな雰囲気をかもし出して、Kが何に対しても心を開いてきていることを表現しているのではないだろうか。帰り、ささいなことでも義妹を突き倒す。

▶母親のカウンセリング（1/23日）：吃りはよい状態。義妹の扱いについて問うのでカウンセラーが義父に会いたいと申し出ると、義妹を父親はある相談機関に連れていき相談しているので、母親がそこに呼び出されていると話す。「ではそちらでよく相談した方がよいですよ」とカウンセラーは云った。

▶母親のカウンセリング（2/20日）：前回母親が話していた相談所へ行って来たかとカウンセラーが聞いたら、義妹がなつかないで困ると話していた。まだ相談所の呼び出しに応じていない様子である。

第79回（最終回2/27日）

治療者はまず、「今日で終りだから好きなことをして遊ぼう」と云う。Kは軽くうなずく。

遊びはサッカー、次は野球、しめくくりは絵を画く。どれもそれ迄と同じにやるが、どこか貧欲な様子が感じられる。始めから終了まで数回の吃音があって、治療者は気になったが、Kは全く気にしていない。帰日も、Kはそれ迄と同じ様に元気であった。

▶母親のカウンセリング（2/27日）：義妹が発熱しているのでマンションにひとり置いてきている。母親は義妹の生治習慣の自立ができていないことが気になっていると述べている。Kのことについては心配がなくなってきた。Kが「妹が家にこないでパパだけけると思っていた」といっているといい、母自身も妹の存在が気になっているように思われた。

IV 考 察

Kの吃音は幼稚園に入って数ヶ月後発生したことから考えると、それまでの母親との2人暮らしから、新しい場での多くの園児や先生との遭遇はKを心理的に緊張させ憶病にしたと思われる。おそらくKは就園迄は母親との人間関係が主であり、父方の祖父や母方の実家でもKは拒否や否定に会ったことはなかったであろう。従って、Kは幼稚園生活の中でいろいろなことにぶつかり情緒障害を起し、吃音という症状が現れたと考えられる。

はじめにも述べたが、現在では吃音の原因は情緒障害に依るものだと多くの心理学者が述べている。

特にことばの出始める2-3才の頃は、周囲に興味を持ち始めて、母親に向かってそれを報せたがったり、要求を出したりなど急速に知的意欲が発達し、それにとまって伝達手段としてのことばも増えてくるが、気持の高ぶりのためにことばでの表現がともなわず、吃音が生じることは稀ではない。1955年ジョンソン(W. Johnson)はこれは吃音ではなく、流暢でない話し方であると主張した。この非流暢性は殆んどが子供の発達とともに消えるが、中には親が吃音であると思って気にしたりすることで、学習され、発達してしまうこともある。

4-5才の幼児期での吃音は、環境への適応がしにくかったり、母親のかかわり方にずれがあったりなどによって、子どもが情緒不安定になり、緊張を高めている場合などに生じることが多い。従って、吃音が発生しやすい子ども自身の問題と、環境を含む親子関係についての問題との相互作用によるものと考えるのが妥当であろう。更に就学をひかえている年齢であるために、親が吃音を注意することによって、子ども自身が気にし、または、流暢に話せないことでフラストレーションを覚えることがある。この場合、吃音は学習され、発達する。非流暢性の話し方が吃音の第一段階で、この幼児期の発語に対する注意・努力のみられるものは第二段階である。放っておけば、発音による随伴運動やその固定化の第三・第四段階へと発達する可能性がある。

吃音児の性格傾向については、多くの実験結果が出ているが、それらによると、要求固執傾向が強く、過度の依存性が認められ、欲求不満耐性の弱さ、分離困難であり、社会適応性がやや低く、気持の表現がややためらいがちなどである。これに対して親の養育態度を調べたいくつかの結果によれば、母親または両親が支配的、過保護、拒否的、矛盾タイプなどがあげられている。そして子どもに吃音が発生すると、親子関係は上記の特徴的な傾向の相互作用のため悪循環が形成されることが多い。

ここで扱った事例Kの場合は、他の吃音のように治療

の効果により、場面への不適応の改善や日常の耐性の改善などができて情緒障害をとり除くことが難かしい状況であった。なぜならば母親は、ひとりで養育している気持ちが強かったため、理性では解っていることでも両極性の扱いをし、それがまた裏腹に出て、なかなか扱いの改善がされないでいた。再婚により義父の援助が加わり、Kの扱いにかわいがるといふ気持ちが出てきた。母親は良きパートナーを得たわけである。始めのうちは、義父のKに対する扱いに不平を持ちながら母親はKのために防波堤となった。そして今までのKの育て方を強調し、義父に賛同させた。義父は昼間自分の娘を母親にみてもらうのだから、そのお返しに休日にはKと遊んでくれるので、それもまたKの吃音に良い結果をもたらした。しかしその反面、義父の観念が背景にしりぞいたことで、義妹の方が新しい環境に合わせることを余儀なくされて結局相談所に行く破目になった。78回の帰りに、Kが義妹を突き倒した場面がそれらを物語っているように思う。母親はKを叱らず、義妹は声をおさえて泣いていた。義父は娘のことで他の相談所に行ったというから、そこで相談することによって、義妹がよくなり、従って家庭も円満になるのではないかと思う。

他方治療場面では、Kは行動的であり、遊びには積極的な発想を持つ方であるが、治療開始期にはK自身が吃音を気にしていたこともあって、防衛的で緊張が高く、行動もぎこちなかった。Kは間もなく治療者に受け容れられることで自信を持ち、攻撃的なプレイに移り、自己主張もするようになり、緊張も解消できるようになった。水痘にかかり3日間位、母親と家に籠り、退行現象もあ

ったと思われるが、母親に甘えることができた時から、Kの表情が柔らいできて、治療者との距離も急速に縮まったように思う。Kはよく話すようになり、動きも大きくなって、生来の茶目も出てきた。最後に、母親はKのために新しい父親を作ってくれた。幸いなことに、Kは義父を全面的に受け容れることができた。Kは会話にも行動にもギクシャクしたところが無くなり、家族の温もりを全身に感じている様子である。

現在は、家庭でも学校でも吃音は消失し、学級会の司会をした時もK自身満足できたと母親から聞いている。何よりもKにとって義父の存在が好転を招き、情緒の安定をみたが、母親の再婚が治療の流れの中で適時であったといふことができる。またカウンセラーが義妹のことを電話で聞いた時(7月)、母親は「元気にしてます」と答えていた。

＜参 考 文 献＞

- 権平俊子他 吃音と夜尿を主訴とした三才男児の一事例 日本総合愛育研究所紀要 第4集 1968
- 森脇要他 情緒障害の分類とその治療の研究——吃音児—— 日本総合愛育研究所紀要 第6集 1970
- 森脇要他 障害児の各種スクリーニング法の整理統合と処遇ガイダンスの体系化に関する研究——その2——「言語障害の研究」 日本総合愛育研究所紀要 第15集 1979
- 小林重雄 吃音児 講座情緒障害児第1巻 黎明書房 1972
- 東山紘久 遊戯療法の世界 創元社 1982

Transition of Stutter with the Change in Home Environment

— Process of Treatment for a Stuttering Boy by Play Therapy and Counseling for His Mother —

Kiyoe. YAMAMOTO, Toshiko. GONDAIRA

A boy K. who had lived with his mother alone since he was two years and six months old because of his father's death began to stutter after he entered a kindergarten.

Accordingly, we started treating him by play therapy when he was five years and two months old. At the same time, his mother began to have a counseling session.

During the treatment, he underwent such experiences as entering a school, mother's engagement and so on. So, his stutter sometimes got better but then got worse under treatment as he was easy to be affected by environment.

But when K was six years and nine months old, his emotional obstacle changed for the better and his stutter faded with his mother's remarriage and the settlement of his home environment.

At the beginning of the treatment, K was timid and couldn't adapt himself to the society. But as the therapist accepted him, he became more and more aggressive, and at last turned to be a cheerful and active boy.

Therefore, we closed his treatment when he was seven years and three months old.